

Ф.И. チュツチェフ政治詩試訳(4)

大 矢 温
飯 島 由 大

チュツチェフ政治詩試訳(1)～(3)に引き続き、六巻本の全集をテキストにしてチュツチェフの政治詩の翻訳を試みる。

1) 無題¹⁾

理性で——ロシアは解せない、
並の尺度では測れない。
そこに独自の気質あり——
ロシアはひたすら信じるのみ。

日本でもロシアの特殊性を強調する文脈でしばしば引用されるチュツチェフの代表的なこの詩は1866年11月末に書かれたとされている²⁾。当時チュツチェフは、娘アンナとスラヴ主義の論客イヴァン・アクサーコフとの婚礼を翌12月に控え、さらに翌年4月には「第1回スラヴ会議」予定されていたのでその準備にも多忙だったと考えられる。

これらふたつの出来事をつなぐ鍵が「スラヴ」の問題だったことを考えれば、この時期、チュツチェフの関心はスラヴの問題へ、なかならずロシアの特殊性へと向かわざるを得なかった。この詩においても理性の西欧に信仰のロシアが対置されている。

2) 無題³⁾

当然の天罰が下された

重い罪、千年の罪故に……

その一撃から眼を背けるなかれ、逃げる事なかれ——

さらば「神」の正義は皆の目に見えむ。(原文大文字)

正義の天罰は公正なり、

それに背きつつその助けを呼ぶなかれ⁴⁾、

裁きが下る……そして教皇の冠は

最後には血まみれになる。

ところで汝よ——その冠の悔悟なき担い手よ、

「主よ」、汝を救い、正気に返し給え——(原文大文字)

「^{かのかた}彼の方に」祈れ、汝の白髪が(原文大文字)

流された血でけがれぬように……

1867年10月27日の作として10月29日付けの『モスクワ』に発表された、とされている⁵⁾。アクサーコフの解説によればこの詩のモチーフは、イタリアのガリバルディ軍と教皇・フランス軍との戦いであったという⁶⁾。イタリア統一軍の教皇領への侵入は、チュッチェフにとって普遍教会から逸脱したローマ教会に対する「当然の天罰」であった。ちなみにこのときのローマ教皇は、チュッチェフが「Encyclica」でその世俗への介入と無謬性の主張を非難したピウス九世である⁷⁾。

あるいはここでチュッチェフは、ガリバルディらによるイタリア統一にスラヴ世界の統一を、そしてローマ侵攻にロシア皇帝による東西両教会の統一を二重写しに見ていたのかもしれない。

3) 無題⁸⁾

ロシアの出版に好意的な方々よ、
いかにあなた方すべてにとって、諸君、
それが嘔吐を催させようとも — 不幸な事に、
事は吐露には至らない。

「嘔吐を催させる」тошнитと「吐露」рвотаが掛詞になっている。検閲改革を巡ってチュッチェフは深くロシア政府の検閲政策に関与しており、ロシアの検閲制度の実態に精通していた。ロシアの検閲についてチュッチェフは「ロシアにおける検閲について」という上申書を1857年に書いているが、その中でも彼はロシアにおいて自由な討論の場があれば必ずや革命思想を論駁することができる、との信念から検閲の緩和を主張していた⁹⁾。ロシアの検閲の実態がいかに吐き気を催すものであっても、検閲制度が存在するがために検閲の改革について公開の場で論じることができないもどかしさを当時のチュッチェフは痛感していたに違いない。1868年4月の作とされている¹⁰⁾。

4) 無題¹¹⁾

あなたはポーランド人には生まれなかった、
傾向的にはシュリャフタであるが¹²⁾、
あなたはロシア人だ — それを理解せよ —
ただ「第三課」風にだが…… (原文大文字)

有力者たちの僕よ、
いかなる高邁な勇氣をもって
あなたは自由な言論を粉砕するのか

口をおさえられた全ての人々の！

あなたがその筆によって

アリストクラチヤ
特権貴族に仕えたのも伊達ではない——

いかなる奴隷部屋であなたは

この騎士道の手法を学んだのか？

もともとこの詩は、新聞『ヴェスチ』の編集者 B. Д. スカリヤーチンを風刺するためにチュツチェフが 1869 年 1 月に書いたものであったが、筆写の形でペテルブルクに流布していた。当時スカリヤーチンの『ヴェスチ』は、地方自治と貴族による専制の制限を主張していたが、チュツチェフのこの詩の直接的な原因は、この『ヴェスチ』が 1869 年 1 月 15 日号の巻頭論文において、保守主義に対抗しロシアに衆愚政治をもたらすものとしてスラヴ派を批判したことによる、とされている¹³⁾。チュツチェフの批判は、『ヴェスチ』の貴族リベラリズムの主張と同時に、スラヴ派に対する言論抑圧の試みにも向けられたと解すべきである。

5) 1869 年 3 月 11 日¹⁴⁾

再び皆の祝日に集った、我等全てを、

我等を今、「福音書の言葉」が教え諭した（原文大文字）

その聖なる純朴さにおいて：

「山の上にある町は、

隠れることができない」¹⁵⁾。

それは我等にも宣言されよ、無為ではなく——

それよ、我等の遺訓ともなれ——

そして我等は、ここで偉大なる日を兄弟のごとく祝いつつ、

かくなる高みに我々の同盟を築こう、
それが皆に見えるように——兄弟の種族たちすべてに。

題名が示すように、この詩は1869年5月11日の「スラヴ慈善協会」によるキリルとメフォディーの記念日にあわせて作られた。「スラヴ慈善協会」はクリミア戦争後、モスクワのスラヴ派やスラヴ学者が中心となってスラヴ民族を援助する目的で1858年に創設された民間団体であるが、やがて1867年の「スラヴ会議」に関与するなど、ロシアの民族意識高揚に少なからぬ影響を与えるようになった¹⁶⁾。

第2聯の後半は新約聖書マタイ伝の言葉。善行は隠さず、むしろ人々の手本になるように示さなければならない、という文脈で使われている。この言葉を引用することによってチュッチェフは、「スラヴ慈善協会」の活動を大いに宣伝するべきだ、と主張していることになる。「スラヴ慈善協会」主催のキリルとメフォディーの記念日をスラヴ諸民族の民族意識を高揚させるために大いに宣伝せよ、と謳っているわけである。

6) モスクワのスラヴ人からチェコ人へ¹⁷⁾

兄弟たちよ、汝らの祝宴に、
汝らの歓喜に、
汝らへとモスクワは向かう
敬虔な期待とともに。

熱狂的な混乱の中に、
大いなる興奮の最中に、
それは証^{あかし}をもたらず、汝らに
愛と団結の証を。

それを手ずから受け取りたまえ
かつて汝らの物だった物を、
古チェコの家族が高き代価にて¹⁸⁾
自らに買いたるものを、

かくも恐ろしき代価なれば、
その記憶は今もまたあり——
汝らの聖物として、
汝らの人生の流れとして。

この「盃」を受け取りたまえ！それは星となりて（原文大文字）
運命の夜中に、皆を照らした
そして汝らの^{わずらい}煩を¹⁹⁾
人々の上に掲げ讃えた。

おお、思い出したまえ、汝らにとって
それが最愛の旗印であったことを、
そして永遠の焚き火の中で
汝らのためにそれが見出されたことを。

そしてこれらの大いなる報酬を、
偉大な父祖の財産を、
彼らの全ての苦しい困難の故の、
彼らの全ての犠牲と苦しみの故の、

汝らは自ら手放したり、
他種族の恥知らずの嘘により、
ああ、それを暴き非難させたまえ、

父祖の名誉と神の真実を与えたまえ。

長く、長く続くのか、この虜囚は
何よりもつらい、精神の虜囚は、
耐えることを宿命づけられた、汝らよ、
血を分けたるチェコ人たちよ？

いや、いや、神の恩恵へと
汝らの父祖が呼び招いたのも故がある、
汝らも分かる、
汝らにはチェコなくして救いがないと。

それは最後に解くだろう
汝らの民族の謎を：
その中には精神の自由と、
統一の栄冠がある。

この素晴らしい「盃」に向かって来たまえ、(原文大文字)
汝らの最良の血によって得られた、
来て、それに近づきたまえ
希望と信仰、そして愛とともに。

この詩は、1869年8月24日にスラヴ協会がヤン・フスの生誕500周年の記念に、正教の教会儀礼で使用される聖盃をかたどった時価1000ルーブルの金の盃をプラハのチェコ人に贈った際にチュッチェフによって朗読された、といわれる²⁰⁾。この詩で謳われる「盃」とは、正教信仰のシンボルと解釈するべきである。ここからチュッチェフがカトリックを信奉するチェコ人に対して、正教信仰を受け入れよ、と呼びかけていることが分かる。

ヤン・フスはローマに対する宗教改革を唱え、異端審問によって焚刑に処せられた15世紀のチェコ人のカトリック司祭。チュツチェフはフスの伝統の中にチェコ人のローマからの離別の可能性を見ていた。11聯目で謳うように、チュツチェフはチェコ人の正教受容の中に「精神の自由と統一の栄冠がある」と考えたのだ。

7) 焚刑のフス²¹⁾

焚火が用意され、
運命的な炎が焚かれる準備はできた。皆押し黙る。
軽くはぜる音だけが聞こえ — そして焚火の下層では
焚火の火が背信的に漏れ光る。

煙が流れ出し — 人々はより密に群がった、
ここに彼ら全てがある — 暗い世界の全てがある：
そこには苦しめられている人も — 苦しめている人もいる、
嘘と暴力 — 騎士団と聖歌隊。

そこには背教の^{カエサル}皇帝 — 聖と俗の
公たちのいと高き^{むれ}群、
そして彼自身、ローマの主教は、
その無謬性の故に罪がある²²⁾。

そこには老婆がいる — 平凡だが
それ以来、忘れ得ぬ。
彼女は祈りつつ、安堵の息とともに
薪束を、^{レプトン}寄付のごとく、焚火に供えた²³⁾。

焚火では、受難を前にした生贄のごとく、
あなた方の前に偉大なる信心の人が立ちおり、
すでに火の輝きに包まれ、
彼は祈る — 声は震えず。

チェコ民族の聖なる教師は、
キリストのおそれを知らない証言者は (原文大文字)
ローマの嘘の仮借なき暴露者は、
高貴なる己の純朴さによって

「神」も民をも裏切らず、(原文大文字)
彼は戦った — だが勝つことあたわず —
「神」の真実、その自由のために、(原文大文字)
全ての、ローマがたわごとと名付けた全てのものために²⁴⁾。

彼は空にあり — 兄弟愛の精神として
彼は今もここにあり、今も自分の身内の中に、
彼は光を放つ、彼は自らの血にて
キリストの血を擁護した、彼らのために。

おおチェコの地よ — おお血を分けた一族よ！
自らの遺産を裏切るな —
おお、自らの精神的偉業を
兄弟統一の祝典を成し遂げよ！

そしてすでに久しく汝をさいなむ、
佯^{ようきょう}狂のローマとの鎖を断ち切り、
消えることなき「フスの」焚火で (原文大文字)

溶かせ、最後の鎖輪^{くさりわ}を。

1870年3月にスラヴ慈善協会によって催されたパスハの夕べのために作られ、活人画とともに朗読された。後に雑誌『ザリヤー^{ザリヤー}』に発表されたが、最初発表されたときには第4聯と第7聯は含まれていなかったという²⁵⁾。

上記の「6)モスクワのスラヴ人からチェコ人へ」にも見られるように、チュツチェフは、ローマ・カトリックを批判してチェコの民族教会を目指し、その結果、ローマによって処刑されたフスの故事の中に、チェコがローマ・カトリックから離反してスラヴの宗教としての正教を受け入れる可能性を見ている。スラヴ民族と目されながら正教ではなく、ローマ・カトリックを信奉しているチェコやポーランドなどの西スラヴ民族における宗教の問題は、スラヴの民族性と宗教の関係を考える上でチュツチェフにとって常に立ち返るべき問題だった²⁶⁾。

8) 無題²⁷⁾

ルーシの旧きヴィリナの上に²⁸⁾

十字架がまたたく、親族の
そして銅鐘の音が、正教の
響き渡れり全ての高みに。

試練の歳月^{とき}は過ぎ去りて、
恐ろしき事は忘れられた —
そして荒廃の極みすら
ここでは天国の百合となって輝いた。

開闢の日々の最良の
聖なる伝説は蘇った、

だがその後の過去のみが
ここでは闇の王国へとすぎ去った²⁹⁾。

そこからそれは動乱の
夢見となりて時として、
皆の目覚めのその前に
ここで生者の平安を乱す。

空から月が消える、その時に
寒き、朝ぼらけの中に
ふたたび幻影のごときが
蘇ったこの地を彷徨す。

Чyтчуевがヴィリナ経由で国外へ旅立った1870年7月の作とされている³⁰⁾。ヴィリナはポーランド分割に伴って18世紀の末にロシアに編入されているが、それまではポーランド・リトアニア大公国の首都であり、歴史的にヴィリナがキエフ・ルーシに含まれた事実はない。ところが、それにもかかわらずЧyтчуевは「ルーシの旧きヴィリナ」と謳う。したがって、ここでЧyтчуевが謳う「ルーシ」とは、歴史上のキエフ・ルーシのことではなく、スラヴの地として彼が思い描く、ルーシのあるべき姿としての「ルーシ」のことと解釈すべきである。ヴィリナで彼が見た「ルーシ」とは、実在の過去のルーシではなく、ポーランドの影響によってカトリック化する以前のリトアニア大公国のスラヴ的要素であり、また同時に、未来の、あるべき姿としてのルーシであった。西のポーランドの伝統を捨て「ルーシ」となったリトアニアでは、「親族の十字架が」またたき「正教の銅鐘の音が」「響き渡る」のである。

ところが現実のヴィリニユスは、18世紀以降「蘇った土地」としてロシアに編入されながらもポーランドの影響を脱していない。カトリックの影響は「幻影」となり「彷徨」するのである。

9) ふたつの統一³¹⁾

「主」の怒りに満ちた杯から (原文大文字)
血が縁を越えて流れ出し、「西」はその中に沈む — (原文大文字)
血はあなた方へと流れ出す、我等が友よ、兄弟よ —
スラヴ世界よ、より密に団結せよ……

「統一は、— 今日の預言者がこのように宣言した、—
それは恐らく鉄と血によってのみ団結される……」
しかし我等はそれを愛にて団結してみよう —
我々を見るだろう、そこでより固きを……

1870年10月1日に13人のチェコ人が正教に改宗するという出来事があった。これを祝ってスラヴ慈善協会によって祝典が催されたが、その祝典の席上でこの詩が朗読されたことから、この詩は同年9月末に作られたと考えられている³²⁾。実際にプロイセンの宰相ビスマルクがドイツを「鉄と血によって」統一したのは普仏戦争の後1871年のことだが、それ以前、1862年のプロイセン下院議会での「鉄血演説」以来ビスマルクはプロイセンの鉄（武器）と血（兵士）による富国強兵・対外強硬路線を主導していた。

このように「鉄血政策」によってドイツ統一への動きが進む中で、チュツチェフはドイツ統一に伴うオーストリア帝国の解体をも視野に入れている。この詩においてチュツチェフは、正教に改宗しようとするチェコ人たちに対して、ドイツの「縁を超えて流れ出し」た「血」（ドイツ兵）が「あなた方へと流れ出す」と警告している。だからこそ、チェコ人を含むスラヴ世界は「より密に団結」しなければならないのだ。

自由で自然でしかも自発的な有機的結合の原理を欠いた、力によるドイツ統一を見るチュツチェフの視線は冷たく、ドイツの強大化という国際政治上の新

たな状況に対する警戒の念は深い。

10) 無題³³⁾

久しく皆が知りたる馬鹿女^{アマ}が——
落ち着くことなき検閲が
我等の五体に糊口を凌がす——
主よそれに祝福を！

1870年の作とされている³⁴⁾。検閲を「馬鹿女」呼ばわりし、その一貫性のなさを「落ち着くことなき」と非難しているが、どのような動機でчувтчефがこの詩を作ったかは不明。

чувтчеф自身、ペテルブルク外国検閲委員会議長として官職としては検閲官であったが、ロシアの検閲の現実についてはきわめて批判的だった。この詩においても最終行の「主よそれに祝福を！」は彼による検閲に対する辛らつな皮肉と解釈すべきである。

11) 黒海³⁵⁾

あれから15年が過ぎた、
あまた一連の事件が起きた、
しかし信仰は我々を欺かなかつた、
そしてセヴァストーポリのざわめきの
真新しき広がりをお々は聞く。

決定的な雷がごとき一撃よ、
それは突然轟いた、まどろみを破り、
厳しい戦いの中で

今、ただ語られるのは決定の言葉、
それはロシアのツァーリの言葉。

かくも最近、かくも厚顔勝手に
盲目の敵意によりて
築かれしものは全て、——
彼の方の偉大な誠実さの前で
全て自壊した。

そしてこれが——「自由の本性」だ、——
我らが故国の詩人が言うかもしれない、——
お前は騒ぎ立てる、過ぎし日のごとく、
「そして青い波をうねらし、
華となって輝く！……」

15年間お前を暴力は
西の虜囚にしていた、
お前は降伏せず不平も言わなかった、
しかし時が訪れた——暴力は崩壊した：
暴力は忽然と去った。

お前の波は母なるルーシを
ふたたび仕事へと、
そして神の裁きの、その戦いへと呼びかけ^し強い、
偉大なセヴァストーポリを
魔法の眠りから目覚めさす。

そして暴力のさなかに

お前が戦いの嵐から
その思いやりある懐へ隠したものを、
お前は我々に返す、それも無傷で——
不滅の黒海艦隊を。

ルーシの民の心の中で
この日が讃えられますように、
それは——我等の外的な自由、
それはペトロ・パヴロフ寺院の丸屋根の
棺の覆いを照らす……

クリミア戦争の講和条約として1856年3月にパリで調印されたパリ講和条約、およびその付帯協定は、ロシアに対にとって、トルコ領内の正教徒への庇護権の否定や海峡自由通行権の否定など厳しい内容を含むものであった。特に黒海の非軍事化を定めた条項によって、ロシアは黒海沿岸に軍事施設を持つことが禁じられ、黒海艦隊も保持が禁じられた³⁶⁾。以後、パリ条約の廃棄はロシアの主要な外交課題となる。

「あれから15年が過ぎた」と始まるこの詩は、パリ講和条約の15年後、1871年3月に開催されたロンドン会議でロシアのパリ条約破棄が国際的に承認されたことにちなんで作られた³⁷⁾。チュツチェフはパリ講和条約の破棄を、「不滅の黒海艦隊」の復活を、途中4聯目にプーシキンの詩を挿入しながら誇らしげに讃え上げる。

コンスタンチノーポリを奪還して成立すべきチュツチェフの正教帝国の構想からすれば、疑いもなく黒海はロシアの内海である。ここからパリ条約を、本来ロシアのものであるはずの黒海を「虜囚にしていた」西欧の「暴力」と見る視点が生まれるのだ。

この詩はスラヴ委員会が組織したパスハの夕べで活人画とともに朗読され³⁸⁾、「大成功」³⁹⁾を納めたという。すでに彼の汎スラヴ主義的思想は世論の支持

を受けていたことかわかる。

黒海を経由した地中海への海路の確保こそ、ペトロ・パブロフ寺院に眠る歴代のロシアのツアーリたちの宿願だった。

12) 無題⁴⁰⁾

正教的「東方」の日よ（原文大文字）

讃えられよ、讃えられよ、偉大なる日よ、

己が^{かいん}嘉音を広く行き渡らせ

そして全ロシアをそれで覆え。

しかし聖なるルーシの国境によって

その呼びかけを止める事なかれ、

全世界に聞かしめよ、

境を越えて行き渡らせよ、

その遠い波によって

私の実の子供が、

悪病と闘う

その谷におよびつつ、

彼女が運命によって

流刑へと連れ去られた、

彼女が南の空の呼吸を

薬のごとく飲む、彼の^か明るい地へと、

おお、病女を回復させたまえ、

彼女の心に慰めを漂わせたまえ、

キリストの復活の日に

彼女の中で命が完全に蘇るために……

1872年4月のパスハの日に書かれたと言われている⁴¹⁾。チュツチェフと彼の二番目の妻であるエルネスチナとの間に生まれた娘マリアは、当時、嫁ぎ先のバイエルンで肺結核を患って療養中だった。転地療養先の「南」の「明るい地」は「悪病と闘う」「流刑」の地でもあった。実際マリアはこの詩の直後、72年6月に死亡している。

この詩の前半において、チュツチェフは正教の鐘の音が「全ロシア」を包むのみならず、「その呼びかけを」「全世界に聞かしめよ」と訴える。正教の鐘の音が聞こえる場所とは、正教の影響力の及ぶ場所である。この詩においても正教を梃子にしたチュツチェフの汎スラヴ主義の思想を見ることができよう。

13) ナポレオン三世⁴²⁾

そしてお前は自分の宿命的な勲功を立てた、

偉大な力の曖昧な後継者よ、

運命の人ではなく、盲目的な偶然の人よ、

お前はスフィンクスだ、それも低俗な群衆によって見破られた、

しかし地上の物ではない、神の真実の、

反駁不能な布教者よ、

お前は行動で世界に示した、

真実を持たない全てのものがいかに不安定かを：

お前は、荒れ狂う二十年間すべてを

世界を動揺させていた——しかも目的もなく、

お前は世界に多くの偽りを植え付けた

お前は多くの騒動も育てた、

そして無事に残ったものを追い散らした、

そして集められた物を浪費した！
お前に宝冠を乗せた国民を、
お前は嘘によって墮落せ、完全にだめにした；
そして、自分の使命に忠実な者よ、
茫然自失した世界を、自分の遊びによって動乱させて、
無分別な子供のように、
お前は長い動揺にさらした。
暴力と偽りの中に救いはない、
いかに大胆にそれを利用して、
人間の心にとって、
人間の仕事にとって。
知れ、おごれる者よ、今、それが誰であろうと
暴力と嘘で身を固めて、
お前の番はやって来る、遅かれ早かれ、
お前はそれによって負かされるだろう！
しかし悪事のあがないに
お前は世界に一つの偉大な教訓を伝える：
民と諸王がそれによって教え諭されるように
そしてお前と張り合うことを望んだ者はすべてもが；—
ただそこだけに、その民族の家族の中だけに、
最高権力との生きた繋がりがあるところに、
そしてそれが固定されているところに
相互信頼と自由の良心によって、
その条件がすべて聖なるところだけに、
国民の生気があふれる —
彼は王位の側に立っているのか
または眼を覚ましているのか
ツァーリの息子が横たわる寢床の枕元に⁴³⁾、

Ф.И. Чyтчeф政治詩試訳(4) (大矢 温・飯島由大)

全ての民がつい最近
その正教の祈りによって、
取り囲んだ、その病人の寢床に——
おお、そんな裏切り者には場所はない、
多種多様な妙計によってではなく、
そしてきわめて哀れであったらう、
この国民を汚した者は
中傷または、疑惑によって。

ナポレオン三世の訃報に際して1972年12月に書かれた。ルイ・ナポレオンの死に非常な興味を示したチュツチェフは彼について、この詩を創作し、それを妻のエルネスチーナが口述筆記した。73年1月1日にチュツチェフはこの詩を『市民』に掲載しようと編集部のメツシエルスキーの元に持参したが、詩を朗読している最中に卒中の発作におそわれ、以後、病臥することになる⁴⁴⁾。

14) 無題⁴⁵⁾

英国のヒョウは
何故、我々に怒っているのか？
尻尾を振り回し、
かくも怒り唸っているのか？
どこから突然の不安がおきたのか
我々はいかなる罪を犯したのか？
奥深く踏み込みし故か
中央アジアのステップへ、
我らが北の熊が——
我らロシアの民が——
自分を守るという、時折唸り声を上げるという

自らの権利を放棄することを望まない故か
自分の友が望むままに。
世界の前で
世捨て行者の類になろうとしない故か；
そして世界に皆にはっきりと示そうとしない故か、
ステップのゲテモノ皆に
餌として自分の体すべてを売り渡そうとしないが故か。
違う、そうあってはならない！——そして前足を上げる……

これこそヒョウがかくも怒った理由だ。
「ああ、無礼者だ！ああ、彼は恥知らずだ！——
我等のライオンは怒り唸りだした。——
彼は素朴な熊のように防御しようと
私が現われると、前足を上げようとした、
唸り声さえ上げて！
恐らく、
彼に〈もまた〉あるとさえ考えている
同様な権利が
私、ライオン公爵がもつような……
このような甘えを許してはならない！」

1872年9月からベルリンにおいてロシア、ドイツ、オーストリアによって話し合いが続いていた三帝同盟の構想の見通しが立ったことから、ロシアは中央アジアへの進出を本格化する。しかし、ロシアの中央アジア進出は、植民地インドを足がかりにこの地域への勢力拡大をねらうイギリスとの対立を招くことになった。その際に重視されたのはアフガニスタンの北部国境であった。1872年から始まった英露会談において、ゴルチャコフ外相は、イギリスの要求を容れてアフガニスタンの北部への拡大を容認する代わりにアフガニスタンの独立

をイギリス側に認めさせた。アフガニスタンを「緩衝地帯」とすることで英国と直接利害が対立することを避けたわけである。一方、イギリス側も奴隷化されたロシア人の解放を名目にロシア軍がヒヴァに出兵した際は、これを「人道的行動」として容認した⁴⁶⁾。

このような協調路線は英国内ではローリンソン (Sir Henry Rawlinson) をはじめとする強硬論者によって批判されていたが、同時にロシア国内でも Journal de St.-Petersbourg に見られるように対英強硬路線の世論が盛り上がっていた。チュツチェフもまた、このような世論を背景に、ゴルチャコフへの手紙にこの「へっぽこ詩 ВИРШИ」を添えて、中央アジア政策における対英強硬路線を主張したのだった⁴⁷⁾。この「へっぽこ詩」は、彼自身が認めるように詩としてのできは悪いかもしれないが、それにもかかわらずこの詩は、死の床にあってもチュツチェフが政治に関心を抱き、強硬な対外政策を主張していた証拠として貴重である。

この詩においてチュツチェフは、中央アジア進出を「自らの権利」とするロシア、およびロシア外務大臣ゴルチャコフ公爵 (ライオン、公爵) に対して、イギリスの「ヒョウ」(小型のライオン) が反発している事態に注意を喚起し、ゴルチャコフに対しては、イギリスが主張するような中央アジアに対するイギリスの権利は存在せず、イギリスに対して譲歩はすべきでない、と強硬な立場を主張している。

15) 無題⁴⁸⁾

スラヴ人の血筋ではなかったが、
スラヴが何かを全て理解していた、
彼は誠実に自ら全人生をそれに捧げた、
かくも多くの活動をした、短い人生だったが、
そして多くの創意は彼のものだ —
彼は行動で示したのかもしれない、戦場に一人の

献身的で勇敢な戦士がいたことを！……

1872年6月に死んだスラヴ慈善協会ペテルブルク支部の会長 A. Φ. ギルフェルヂンクに捧げた詩。ギルフェルヂンク自身はユダヤ人であったが、正教徒に改宗した⁴⁹⁾。

16) 無題⁵⁰⁾

「東」が波立つのは初めてではない、(原文大文字)
そこでキリストが磔^{はりつけ}にされたのは初めてではない、
そして十字架から色あせた三日月を
列強は自分の盾で隠している。
叫びが広まる：「磔ろ、彼を磔ろ！
ふたたび隷従と苦しみにさらせ！」
おおルーシよ、この音が聞こえないのか
そしてピラトのように自らの手を洗うのか？⁵¹⁾
なにしろこれはお前の胸の血ではないか！

この詩は、1867年にクレタ島のキリスト教住民がトルコに対して蜂起したことが直接的な契機になっていると考えられている⁵²⁾。チュツチェフはこの蜂起に東方問題の解決を見てロシアの積極的な介入を主張したが、ロシア政府はヨーロッパ列強との関係悪化をおそれてキリスト教住民の援助に立ち上がらなかった。すでに前年、1866年にロシアはクレタ島をギリシアに移管するようトルコに提案していたが、この地域におけるロシアの影響力の増大をおそれる英仏墺によってこの企図は阻まれていたのである。

蜂起に失敗したクレタ島のキリスト教徒が処刑され、ふたたびキリスト教徒が隷従と苦しみにさらされている中、ロシアは「ピラト」のように無関心でいられようか、「これはお前の胸の血ではないか！」と、消極的な姿勢を貫くロシ

ア政府に対するチュツチェフの指弾は厳しい。

17) 無題⁵³⁾

船が一隻、濃く湿った霧のなかで
見捨てられたかのごとく泊まっている……
海での最近の嵐によって、
壊れたコンパスは沈黙している、
錨の鎖も断ち切れた……
流れが全てを運んでいく、運んでいく……
測鉛は絶えず投下されるが、
すでに暗礁に乗り上げた……
互いに — 近くには見えず。
おお神よ、死んでしまうのか! —
そして船員には — 途方もない恐怖が……
しかし霧はいつそう濃くなる、
そしてその中で鈍く響いている
船員達の呼び声と叫びが……

彼らを救い給え、主よ、救い給え!
この偉大なる時に神よ、彼らの元へ
せめて一筋、空からの光を!

クリミア戦争後の 1850 年代後半の作と考えられている⁵⁴⁾。チュツチェフにとって「海での最近の嵐」たるクリミア戦争敗戦後のロシアは「暗礁に乗り上げた船」のようなものであった⁵⁵⁾。「濃く湿った霧」が視界を遮り、指針を示すコンパスは沈黙している。敗戦後の絶望的な状況にあって、ロシアは神に祈るしかないのだ。

注

- 1) *Тютчев Ф. И.* “*** (Умом—Россию...)” // Полное собрание сочинений и письма в шести томах. М., 2003. Т. 2. С. 165.
- 2) См. “Комментария” // Там же. С. 530.
- 3) *Тютчев Ф. И.* “*** (Совершается заслуженная кара...)” // Там же. С. 185.
- 4) ローマ教皇によるフランス軍に対する支援要請を指す、との解釈もあるが (“Комментария” // Там же. С. 548.)、「в отпор ей, чью помощь не зови」と素直に読めば、ここでチュツチェフは、天罰としてのガルバルディ軍の侵攻に直面した教皇に対して「神に助けを呼ぶな」、と命じていると解釈できる。
- 5) См. “Комментария” // Там же. С. 548.
- 6) *Аксаков И. С.* Биография Федора Ивановича Тютчева. М., 1886. С. 184.
- 7) 詩「Encyclica」については、大矢他「チュツチェフ政治詩試訳(3)」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第65号、2006年、206-207ページ参照。
- 8) *Тютчев Ф. И.* “*** (Печати русской доброты...)” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 187.
- 9) チュツチェフとロシア政府の検閲改革とについては、大矢「Ф. И. Чyтчeф и цeнзyрa в Poccии」、1994年、北海道大学スラブ研究センター『スラヴ研究』第41号、参照。
- 10) См. “Комментария” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 551.
- 11) *Тютчев Ф. И.* “*** (Вы не родились поляком...)” // Там же. С. 194.
- 12) шляхтич：ポーランド貴族のこと。
- 13) См. “Комментария” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 558.
- 14) *Тютчев Ф. И.* “11-ое мая 1869” // Там же. С. 200.

- 15) 新約聖書「マタイによる福音書」第5章15にこの言葉がある。
- 16) См. Краткий очерк деятельности С. Петербургского благотворительного общества за 25 лет его существования 1868-1893 гг. СПб, 1893. С. 8.
- 17) Тютчев Ф. И. “Чехам от московских славян” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 206-207.
- 18) староческая семья：キリル文字を発明したキリルとメフォディーを招いたモラヴィア王国のこと。「以前あなた方の物だった物」とは、ヴィザンチン帝国との絆と考えられる。
- 19) немощь：フスの受難を示す。
- 20) См. “Комментария” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 568.
- 21) Тютчев Ф. И. “Гус на костре” // Там же. С. 216.
- 22) ローマの教皇無謬説に対してチュツチェフは、「2）無題」などにおいても再三、批判しているが、ピウス九世によって教皇無謬説がローマの教義となったのは、1870年にこの詩が書かれる直前のことだった。チュツチェフにとって無謬説は同時代の争点だった。
- 23) 新約聖書「ルカによる福音書」第21章に2レプタという、額は少ないが彼女にとっては生活費の全てを献金した貧しい寡婦についての記述がある。
- 24) チュツチェフは、1864年の詩「Encyclica」においても「たわごと」として良心の自由をはじめとする俗権へ介入しようとするピウス九世を強く批判している。大矢他「チュツチェフ政治詩試訳(3)」206-207ページ参照。
- 25) См. “Комментария” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 577.
- 26) 宗教とスラヴの民族性との関係については、大矢「チュツチェフとスラヴァンストヴォ」成文社『ロシア思想史研究』第3号、2006年所収、参照。
- 27) Тютчев Ф. И. “*** (Над русской Вильной...)” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 218.
- 28) 現在のリトアニア共和国の首都ヴィリニユスの旧名。
- 29) 14世紀のゲディミナス大公およびその子アルギルダスの時代にリトアニア

アは西南ルーシの諸公を配下に納めて発展したが、その結果、リトアニア国内のスラヴ化が進み、正教徒の比重が増した。14世紀末アルギルダスの子ヨガイラがポーランド国王を兼ねるとリトアニアのカトリック化が進んだ。

- 30) См. “Комментария” // Там же. С. 579.
- 31) *Тютчев Ф. И.* “Два единства” // Там же. С. 221.
- 32) См. “Комментария” // Там же. С. 582.
- 33) *Тютчев Ф. И.* “*** (Давно известная всем дура...)” // Там же. С. 227.
- 34) См. “Комментария” // Там же. С. 592.
- 35) *Тютчев Ф. И.* “Черное море” // Там же. С. 230.
- 36) Пари講和条約については、大矢「クリミア戦争とゴルチャコフ外交」『法学新報』第107巻3/4号、平成12年、参照。
- 37) См. “Комментария” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 594.
- 38) Письмо А. Ф. Гильфердинга к Н. В. Гербелю от марта 1871 г. // Литературное наследство. М., 1989. Т. 97, кн. 2. С. 416–417.
- 39) Письмо Д. Ф. Тютчевой к Е. Ф. Тютчевой от 15 марта 1871 г. // Там же. С. 417.
- 40) *Тютчев Ф. И.* “*** (День православного Востока...)” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 238.
- 41) См. “Комментария” // Там же. С. 601–602.
- 42) Тютчев Ф. И. “Наполеон III” // Там же. С. 243–244.
- 43) 1865年4月にニースで死亡したアレクサンドル二世の長男、ニコライのことを指すと考えられる。См. “Комментария” // Там же. С. 607.
- 44) См. “Комментария” // Там же. С. 605–606.
- 45) *Тютчев Ф. И.* “*** (Британский леопард...)” // Там же. С. 248.
- 46) См. Сахаров А. Н. (ред.) История внешней политики России: Вторая половина XIX века. М., 1997. С. 116–119.
- 47) См. “Комментария” // Там же. С. 609.

- 48) *Тютчев Ф. И.* “*** (Хоть родом он был не славянин...)” // Там же. С. 259.
- 49) См. “Комментария” // Там же. С. 617.
- 50) *Тютчев Ф. И.* “*** (Не в первый раз...)” // Там же. С. 269.
- 51) 新約聖書「マタイによる福音書」第19章24-25節に、キリストに処刑判決を下したピラトという人物が、自らに責任がないことを示すために手を洗った、との記述がある。
- 52) См. “Комментария” // Полное собрание сочинений. Т. 2. С. 623.
- 53) *Тютчев Ф. И.* “*** (Корабль в густом...)” // Там же. С. 270.
- 54) См. “Комментария” // Там же. С. 624.
- 55) См. *Тютчев Ф. И.* Письмо о цензуре в России // Там же. Т. 3. С. 208.